・・・力、若きは力ぞ（校歌『空の翼』）

松　木　真　一

校歌『空の翼』の一節「・・・力、若きは力ぞ」！　関西学院大学に入学してきた多くの新入生たちの若い力やエネルギーに満ちあふれている姿に、何かぴったりの歌詞でもある。この「力」という歌詞に接するとき、実は私自身もたまにではあるが思い出すことがある。関西学院中学部には当時、相撲部があった。ただ背が高いというだけの理由で、勧誘を受けていたこともあって、よく放課後の部活練習を見に行った。その時のことである。顧問をしておられた社会科の浜田幸四郎先生の熱血指導の強烈だったこと。取り組んでいる最中、部員が土俵際に追いつめられると、メガホンの先をその部員の耳もとまで近づけて大声で必死に連呼するのだ。「がまんだ。耐えろ。力出せ！」と。大抵は、その大声の方に耐えられなかったようであるが、とにかく先生のその叫び声は私の脳裡に突き刺さったまま中学部、高等部、大学そして今に至るまでも頭のどこかで叫び続けている。もっと耐える力を！もっと忍耐力を！と。これまでにも何かがあった時、不思議にもこの叫びを思い出しては励まされたり、元気づけられたりしたこともある。「若きは力ぞ」と校歌を歌いながらも思い出すほど、どこまでも印象深い想い出である。

しかしながら、また新入生も在学生も当然のことではあるが、学生時代にはいわゆる土俵際、瀬戸際とも言うべき状況に直面することもきっとある。勉学や研究が行きづまる、人間関係や部活がうまくいかない、予想もしない問題やアクシデントに見舞われ、悩み疲れて心身ともに追いつめられてしまう・・・。何も在学中に限らず、これからの長い長い人生においても、である。そういうときこそ、自らの若さという素晴らしい力を存分に発揮し、しっかりと耐えて乗り越えてゆくように、という力強いメッセージを関西学院は今も校歌を通して一人ひとりに贈り続けているのである。

聖書の中に興味深い言葉がある。

「私たちは四方から苦しめられても行きづまらず、途方に暮れても失望せず、迫害されても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない」（Ⅱコリント４：８－９）

この力強い聖句のキーワードは「・・・にもかかわらず」（ティリッヒ）である。苦しめられている「にもかかわらず」行きづまらない、途方に暮れている「にもかかわらず」失望しない・・・！

実際、一人ひとりの行く手には、さらに深刻な行きづまり、決定的な土俵際、瀬戸際、自力ではもうどうにも耐え難い大きな壁、限界状況を経験することも一度や二度はあるだろう。そこではもう挫折するほかない、絶望してもはや立ち直ることすら出来ない、というケースも多い。しかし、そのような状況にもかかわらず、決して挫折することも絶望することもなく、なお自分の人生を力強く生き抜いていくことができるとするならば、それは、まさに人知を超え人間の力を超えて、私たちの存在の深みから勇気づけてくれるような根源的な力、そのような力から支えられ励まされ、前向きに生かされていく、ということによってにほかならない。関西学院の宗教運動は、このような「力」について考える絶好のチャンスではないだろうか。

（理工学部宗教主事）